

古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第135号



おんじょうじ
園城寺一切経蔵
[滋賀県大津市園城寺町]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

ながらさん
長等山
おんじょうじ
園城寺

[滋賀県大津市園城寺町]

起源

長等山園城寺は、琵琶湖南西の湖岸近くにある長等山中腹に位置する天台宗の総本山で、「三井寺」の通称名で呼ばれています。『日本書紀』に記された「山御井」が長等山麓に湧く霊泉（御井）とされ、天智・天武・持統三天皇の御産湯に用いられたことから「御井の寺」と呼ばれるようになり、その後、三井寺の開祖・智証大師円珍が、この霊泉を密教の三部灌頂の法水に用いたことから、「三井寺」と称するようになりました。

667年、天智天皇により飛鳥から近江に都が移され、近江大津京が開かれました。671年12月に天智天皇が崩御され、その翌年に大友皇子（天智天皇の子）と大海人皇子（天智天皇の弟：天武天皇）が皇位継承を巡り、「壬申の乱」が勃発しました。大海人皇子に敗れた大友皇子の子 大友与多王は父の霊を弔うために「田園城邑（田畑と屋敷）」を寄進して寺を創建。その志に感銘を受けた天武天皇から「園城」という勅額を賜ったことが、「園城寺」の始まりとされています。

勝利をおさめた大海人皇子は再び飛鳥に遷都し、近江大津京はわずか5年で廃都となりました。

貞観年間(859～877)になり、智証大師円珍が園城寺を天台別院として中興されてからは、東大寺・興福寺・延暦寺と共に「本朝四箇大寺」の一つに数えられ、南都北嶺の一翼を担ってきました。

円珍の死後、円珍門流と慈覚大師円仁門流の対立が激化し、正暦4年(993)、円珍門下は比叡山を下り一斉に三井寺に入ります。この時から延暦寺を山門、三井寺を寺門と称し、天台宗は二分されました。その後、両派の対立や源平の争乱、南北朝の争乱等による焼き討ちなど幾多の



慶長4年(1599)に再興された、三井寺の本堂「金堂(国宝)」



覆屋「閻伽井屋(あかいや)」で護られる「三井の霊泉」

法難に遭遇しましたが、智証大師への信仰に支えられた人々によって、その教法は今日に伝えられています。

ユネスコ「世界の記憶」に登録

2023年5月、三井寺が所蔵する国宝の史料群がユネスコ「世界の記憶」に国際登録されました。史料群は、三井寺と東京国立博物館が所蔵する国宝56件からなり、日本仏教、ことに天台学や密教の興隆に尽力した智証大師円珍(814～891)が残した広範な分野にわたっています。

9世紀に円珍が唐に留学したときの史料は、当時の日中両国にわたる文化交流を如実に物語るもので、なかには円珍が唐の役所から交付された通行許可証「過所」の原本も含まれており、唐の法制度を示す貴重な文書であるばかりか、良好な状態で伝えられた世界唯一の伝存例として知られています。また、日本の国家制度の確立にまつわる公文書や円珍への祖師信仰を示す自筆文書など9世紀に遡る多様な史料からなっています。



通行許可証「過所」の原本

重要文化財「一切経蔵」(表紙写真)

一切経を安置するための堂で、三井寺唯一の禅宗様建築。もとは山口県にある国清寺(現在の洞春寺)の経蔵で、慶長7年(1602)に毛利輝元によって移築されました。外観の花頭窓や波形格子の弓欄間、内部を土間、鏡天井とするなど、典型的な禅宗様の意匠でまとめられています。内部中央には、八角形の回転する輪蔵が据えられ、仏典類を網羅した一切経を収蔵しています。漆塗りの経篋を納めた引き出し面より前に柱を立て、屋根の八方に破風を起こしているのは他に類例がなく、室町時代に遡る禅宗様経堂の古例として貴重です。

令和7年度 檜皮採取者(原皮師)中級研修

期 間 ● 令和7年8月25日(月)
～令和8年1月23日(金)
研修生 ● 12名

令和7年度の檜皮採取中級研修は、8月25日(月)の野山国有林(奈良県)から始まり、仏通寺国有林(広島県)、賤母国有林(長野県)、権現山国有林(和歌山県)、城山国有林(山口県)、鞍馬山国有林(京都府)、千石谷市国有林(大阪府)、栃本市国有林(埼玉県)、大瀧神社(福井県)、九州大学福岡演習林(福岡県)にて全13クルの研修を行い、1月23日(金)に終了しました。

厳しく険しい環境の中での作業となりましたが、各クルのリーダーのもと、違う事業所の研修生たちが切

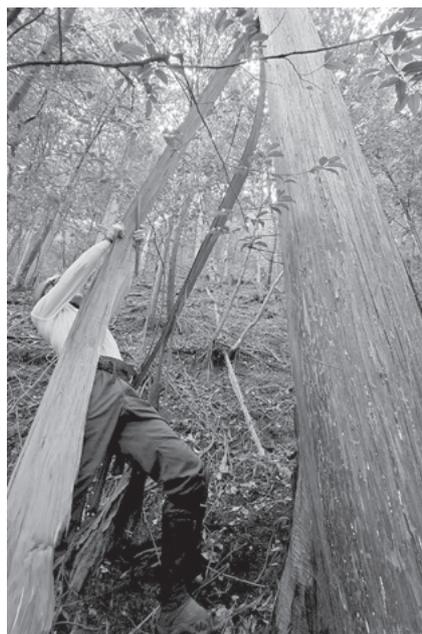
磋琢磨し、貴重な檜皮資材の確保及び技術の研鑽に励んでいただきました。今年度は熊出没情報も国内で多く報道され、事業短縮の判断を余儀なくされることもありました。本年度も研修林を提供していただきました皆さまに感謝申し上げますとともに、今後ともご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



採取された丸皮の集積(鞍馬山国有林)



ヘラ入れ(九州大学福岡演習林)



檜皮の剥き上げ(権現山国有林)



檜皮の剥き上げ(賤母国有林)



檜皮の荷造り作業(仏通寺国有林)



檜皮の荷造り作業(野山国有林)



檜皮の切断(大瀧神社民有林)

令和7年度 檜皮採取視察会及び見学会

本年度も各地にて檜皮採取視察会及び見学会を行いました。檜皮採取の技法を見て、触れる場を提供し、日本の伝統技術・文化財を身近に感じていただく取り組みとして、原皮師を講師に毎年行っています。

長野県の林業大学校や南木曽町立南木曽小学校をはじめ木曽森林管理署南木曽支所、奈良森林管理署、広島森

林管理署、和歌山森林管理署新宮森林事務所、河内長野市役所の方々に原皮師の技術を注目いただけたことがとてもありがたいと感じました。

今後も檜皮採取見学会を通じて、伝統文化に触れていただく機会を提供し続けてまいります。

視 察 会

期 日 ● 令和7年9月2日(火)、9月16日(火)、11月7日(金)、11月10日(月)
会 場 ● 千石谷市有林(大阪府)、権現山国有林(和歌山県)、仏通寺国有林(広島県)、野山国有林(奈良県)
参加団体 ● 奈良森林管理事務所、広島森林管理署、河内長野市役所、和歌山森林管理署新宮森林事務所



作業を見つめる森林官



原皮師の作業を視察する森林官



森林官による視察

見学会

期 日 ● 令和7年10月8日(水)、10月10日(金)
会 場 ● 賤母国有林(長野県)
参 加 者 ● 長野県林業大学校、南木曾町立南木曾小学校

●南木曾町立南木曾小学校



作業を見つめる小学生たち



指導員の説明を一生懸命に聞く

●長野県林業大学校



ぶり縄での木登りを体験する林大生



学生の視線を浴びながら檜皮採取作業に取り組む原皮師



見学会の説明風景



檜皮荷造り作業に注目する林大生

令和7年度 檜皮採取査定会

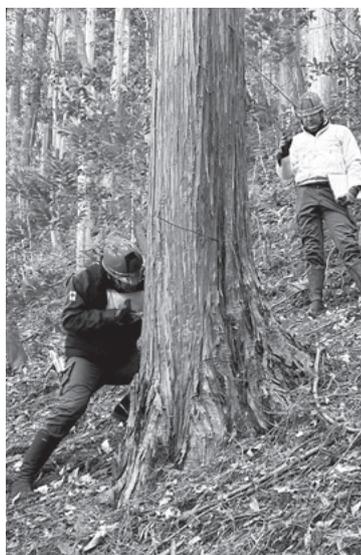
期 日 ● 令和8年1月22日(木)、23日(金)
会 場 ● 城山国有林(山口県)

檜皮採取査定会は、Bランク及びCランク研修生の檜皮採取研修の日頃の成果を査定するとともに、技術の継承と理解向上を目的として実施しています。

当日は、当保存会副会長をはじめ理事、指導員及びCランク研修生が参加し、総勢5名で行いました。審査を受ける研修生は1名、査定員は指導員2名、理事2名の4名にて実施しました。

査定日は少し雪も舞う寒さの中でスタートし、かなりの急斜面ではありましたが、研修生は厳しい環境にもめげずにひたむきに採取に取り組んでいました。会員の方も熱心に作業する研修生をじっと見つめておられました。今後も採取研修事業の技術研鑽や資材確保の充実に向け、取り組んでいただきたいと思う所存です。

この度の査定会にご協力いただきました関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。



査定員が見つめる中真剣に作業をする研修生



ぶり縄を使用しての檜皮採取



荷造り作業を確認する査定員



結束後大切り包丁で檜皮を切断



集積場まで檜皮を運ぶ研修生



査定会後の記念写真

令和7年度 第4回指導者, 準会員合同研修会

期 日 ● 令和7年12月18日(木)、19日(金)
会 場 ● 九州大学福岡演習林
協 力 ● 九州大学福岡演習林

今回の指導者, 準会員合同研修会は九州大学福岡演習林で開催しました。

当日は45名の参加があり、1日目は九州大学福岡演習林内のヒノキ林にて指導員2名、採取研修生7名による採取の実演を行い、参加者及び大学関係者も交えての見学会となりました。2日目は九州大学 大学院農学研究院教授 古賀 信也様より「九州大学福岡演習林における檜皮研究」をテーマに講義をしていただき、講義後には当保存会の指導員2名と大学関係者及び参加者による意見交換会も行いました。最後に文化庁 文化資源活用課 修理指導部門 文化財調査官 結城 啓司様より総括をしていただきました。



実演する研修生



檜皮採取の説明を行う指導員



古賀教授による演習林の説明



古賀教授による講演

実演見学会

説明・解説 ● 九州大学 大学院農学研究院 教授・博士(農学) 古賀 信也 様

1日目

講演会、意見交換会

挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 友井 辰哉

講 義 ● 九州大学 大学院農学研究院 教授・博士(農学) 古賀 信也 様
テーマ「九州大学福岡演習林における檜皮研究」

総 括 ● 文化庁 文化資源活用課 修理指導部門 文化財調査官 結城 啓司 様

2日目

令和7年度 「文化財屋根葺士養成研修」の座学

期 間 ● 令和7年5月12日(月)～9月30日(火)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

今年度、新たな試みとして「文化財屋根葺士養成研修」の座学(外部講師担当分)を、当会の正・準会員に開放いたしました。有識者による貴重な講義を広く共有する初の取り組みでしたが、幸いにも多くの方々に参加いただくことができました。

聴講生からは、文化財保護法の成り立ちや日本建築史、技術の基礎となる植物学などを通じ、「文化財保存の意義と技術継承の重要性を再確認できた」との感想が多く寄せられました。門戸を広げたことは、技術者としての理解を深める非常に有意義な試みであったと感じております。今後も本取り組みを継続してまいりますので、ぜひ多くの方に聴講していただければ幸いです。

●聴講生の声.....

佐々木 綾子 [有限会社 ひわだや]

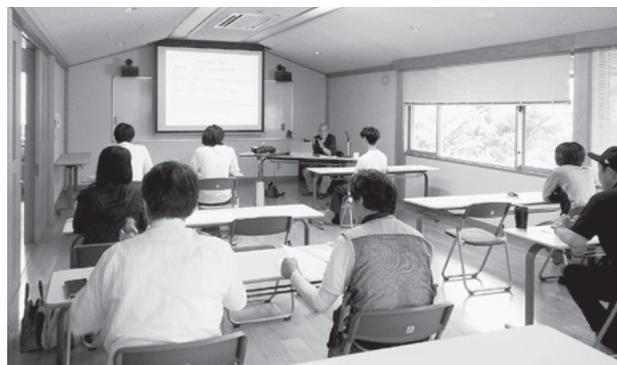
文化財屋根葺士養成研修の聴講では、文化財建造物及び日常の業務に関連する法規、知識を体系的に学ぶ機会となった。「日本建築史」では、古代からの建築の推移を学ぶ中で、具体的な文化財建築を取り上げての解説もあり、今後実際に本物を見て学んでいく道筋を与えていただいた。「文化財保護法」では、文化財建造物に対する法知識はもちろんのこと、その知識を踏まえ保存会会員としての提案力も磨かなければならないと決意を新たにした。「労働安全衛生法」では、命に直接関わる安全衛生教育が事業所としての最重要事項であることを再認識した。万一の場合の行動マニュアルを再確認できたことは大きな成果だった。「材料の性質と種類」では、樹木の知識を取得するのみならず、檜皮葺に関する先生ご自身の熱い思いに感銘し、日本の風土の中で檜皮葺を継承していく事業者としての使命を再確認した。

このような機会を与您いただき、保存会事務局、聴講の方々、文化財屋根葺士養成研修生にも改めて感謝申し上げます。

大石 薫利 [谷上社寺工業株式会社]

今回の研修(講習)では、法律や植物学、建物の構造など、屋根を巡る多角的な視点から学びを得ることができ、非常に有意義な時間となりました。

入社6年目を迎えましたが、屋根の世界は奥深く、自



分の経験がまだ点に過ぎなかったことを痛感しています。特に印象的だったのは、文化財保護法などの現代のルールが整備される以前から、その時々の人々の暮らしや知恵によって建物が守られ、変化を遂げてきたという歴史的背景です。私たちの携わる仕事が、単なる修理や施工ではなく、長い年月をかけて受け継がれてきたバトンを受け取る行為なのだと改めて実感しました。

「屋根」という一つの対象にも、法律や自然、意匠など数多くの要素が絡み合っています。今回の学びを機に、今後も専門外の視点からも知識を深め、より広い視野を持って日々の業務に取り組んでいきたいと思えます。

楠本 浩史 [檜皮葺古家]

檜皮葺古家に入り歩み続けていますが、特に入社後10年間は少人数で現場の忙しさに追われ、体系的な研修を受ける機会をなかなか持てずにいました。今回、改めて腰を据えて学ぶ機会を得られたことは、私にとって非常に大きな財産となりました。

講義では、日本建築の構造や仕様が時代ごとに変遷し、柱の太さや装飾の趣が変化していく過程に深い興味を惹かれました。また、文化財保護法が幾多の歴史的危機を乗り越えて成立した背景を学び、私たちが日々向き合っている仕事がいかに貴重な文化的価値を守るものであるかを再認識し、身の引き締まる思いがしました。

実務に直結する原材料の講義では、植物の持つ多様な性質を学びました。特に檜皮採取の際、内樹皮やその奥の形成層を決して傷つけてはならないという「鉄則」の科学的な理由を理解できたことは大きな収穫です。これまでは経験則として守ってきた作法が、理屈を伴った確信へと変わりました。

長年の現場経験という「点」が、知識を得たことで「線」としてつながった有意義な時間でした。この学びを糧に、伝統技術の継承と安全な現場づくりにいっそう邁進してまいります。

屋根葺士養成研修の講座を振り返って

●講師からの言葉.....

[講師]
office 萬瑠夢
代表 村田 信夫 様



研修科目 ● 「文化財保護法」

研修期日 ● 令和7年8月1日(金)

研修内容 ● 文化財保護制度の概要、文化財保護の体系、文化財保護の制度、伝達フローチャート、文化的景観

今年の研修生3人は、一言でいうと「もの静かで温和」。講師の斎藤先生とも「最近の若い子はえらいおとなしいなあ」と話していたのですが、正直なところ、もう少し元気があってほしいと感じたのも事実です。

そんな場を盛り上げてくれたのが、一緒に参加された聴講生の方々でした。活発に質問や意見を投げてくださいのおかげで、研修生たちも刺激を受け、結果として非常に中身の濃い研修になったと思います。

研修生の皆さん、職人の世界は「聞いてなんぼ、動いてなんぼ」です。次回の研修では、こちらが驚くくらいガツガツと前のめりな姿勢を見せてくれることを期待しています。活気ある場を作っていただいた皆さま、本当にありがとうございました。

[講師]
高橋事務所
高橋 弘次 様



研修科目 ● 「労働安全衛生法」

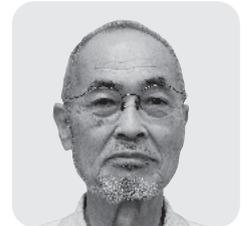
研修期日 ● 令和7年8月29日(金)

研修内容 ● 法律の成り立ちとその背景
労働災害の発生メカニズムとその防止策
災害事例の紹介と発生時の対応
熱中症の予防と対応策、法改正の内容

研修のテーマである労働安全衛生法は、働く人の安全と健康を確保し、快適な職場環境を形成するための重要な法律です。講義では、法律の成り立ちや背景にも焦点

を当て、安全衛生に対する意識を向上していただけるようお話ししました。職業柄、危険を伴うお仕事です。この講義を通じて、あらためて自分自身の安全と健康を見直す機会になれば幸いです。

[講師]
岡山市半田山植物園
園長 柴田 映昭 様



研修科目 ● 専門科目 I 「原材料性質と種類」

研修期日 ● 令和7年9月25日(木)・26日(金)

研修内容 ● 植物の分類と性質等について、植物の分類、植物の生態、樹木の構造、樹木について、檜の歴史、檜皮葺、茅葺について、文化財の伝統技術等

日常生活に於いて、ほとんど関わりのない植物についての講義は、研修生にとって違和感というか場違いな内容と感じたようである。しかし、今後、職業として携わる文化財の修復に於いて、植物は原材料として避けて通ることのできないものであり、知識の習得について前向きに取り組まなければならないという姿勢が見受けられた。

また、今回から会員、準会員の方が聴講生として参加された保存会の取り組みは、実際に携わってこられたうえで参加ということで、踏み込んだ質問等、研修生にとって参考になったのではないかと思います。

令和7年度 屋根板製作者養成研修

期 間 ● 令和7年11月10日(月)～20日(木)
場 所 ● 株式会社児島工務店 島根工場
講 師 ● 嘉本 洋士(株式会社児島工務店)

平成30年に屋根板製作選定保存技術の保存団体として認定を受けたことを契機に、平成31年度より屋根板製作者養成研修を行うこととなりました。株式会社児島工務店の協力のもと、研修生3名を対象に令和7年11月10日から20日までの期間で実施しました。

研修生は、杉材を用いて原木の見分け方、材の取り方、木取り方法の基本、その後平板(1.0尺×1.0尺)の拵えなどを習い、興味深く熱心に作業を行っていました。初めて行う作業なので最初は戸惑っていましたが、最終日に近づく頃には随分手慣れた様子で、作業は順調に進みました。後期研修でも屋根板製作者養成研修があります。今回の研修を生かし、技術向上するように頑張してほしいと思います。

文化財建造物を保存していくうえでは、良質な資材の確保が必要になってきます。研修生には、この研修を通じて屋根板製作の大切さを十分に理解し、良い経験にさせていただきたく思います。

来年以降も研修は続きます。この研修がいつまでも続くよう皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



板へぎ作業をする研修生



板へぎ作業をする研修生



木取りの説明をする講師



板へぎ作業をする研修生

令和7年度 茅葺中級研修

期 間 ● 令和7年9月1日(月)～30日(火)
令和8年1月12日(月)～17日(土)
現 場 ● 茅葺／史跡足利学校 裏門
(栃木県足利市昌平町2338)
茅刈り／大室山(静岡県伊東市)

史跡足利学校 裏門

講 師 ● 猿橋 成博(株式会社 茅葺屋根保存協会)
研修生 ● 金沢 翔太(有限会社 熊谷産業)
渡辺 和也(株式会社 越乃かやぶき)



棟積み

今年度は、9月1日(月)～30日(火)まで栃木県足利市の史跡足利学校裏門において葺き替え研修を行いました。研修では、当会準会員 猿橋成博が指導にあたり、研修生2名は宮城、新潟からの参加となりました。

また、令和8年1月12日(月)～17日(土)までの茅刈り研修では、当会正会員 大西謙之・水野暁彦がそれぞれ指導にあたりました。研修生4名は岐阜、宮城、新潟、山梨からの参加となりました。地域の皆さまにもご協力いただき、今年も良質な茅が採取できました。



平葺き

大室山 茅刈り

講 師 ● 大西 謙之(合同会社 大西茅葺)
水野 暁彦(株式会社 茅葺屋根保存協会)
研修生 ● 山口 成貴(田中社寺株式会社)
金沢 翔太(有限会社 熊谷産業)
八ッ橋 崇市郎(株式会社 越乃かやぶき)
新津 侑樹(株式会社 石川工務所)



茅刈り

令和7年度 茅葺きフォーラム

期 日 ● 令和7年9月12日(金)
会 場 ● 史跡足利学校裏門 屋根葺替研修現場
(栃木県足利市昌平町2338)
足利のわかりやすい歴史館(足利まちなか遊学館)
(栃木県足利市通1丁目2673-1)

令和7年度中級技術研修の期間中に現場見学及び協議会を開催しました。今回は、栃木県足利市の史跡足利学校裏門の屋根を葺き替える研修で、講師 猿橋 成博の指導のもと栃木県特有の屋根の葺き方を教わる機会に恵まれました。

協議会では史跡足利学校 研究員・学芸員 大澤 伸啓様、公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 増渕 靖裕様、京都女子大学 名誉教授 斎藤 英俊様にご講義をいただき、短い時間ではありましたが、足利学校や文化財建造物の歴史について学ぶことができました。

講師と研修生によるパネルディスカッションも行われ、栃木県特有の茅葺屋根の技術などについても討論を深めました。



史跡足利学校裏門 見学会

見学会 「史跡足利学校裏門」

現場説明 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 講師 猿橋 成博
史跡内施設案内 ● 史跡足利学校 所長 齋藤 和行様

協議会 「足利のわかりやすい歴史館」

挨拶 ● 足利市教育委員会 文化課 課長 中村 等様
開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 友井 辰哉
講義 ● 史跡足利学校 研究員・学芸員 大澤 伸啓様
テーマ「史跡足利学校の歴史について」
公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 増渕 靖裕様
テーマ「茅葺屋根の復原 岩屋熊野座神社覆屋の事例」
京都女子大学 名誉教授 斎藤 英俊様
テーマ「世界遺産：白川郷・五箇山の合掌造り集落」
討論会 ● 議題「栃木県の茅葺屋根の特徴と実技解説」
進行者 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 茅担当理事 長崎 貴宣
総評 ● 文化庁 文化資源活用課 文化財調査官 稲垣 智也様
閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 副会長 河村 雅史

協議会

足利市教育委員会 文化課▶
課長 中村 等様



協議会風景



協議会風景



◀史跡足利学校
研究員・学芸員 大澤 伸啓様

(公財)文化財建造物保存技術協会▶
増淵 靖裕様



◀京都女子大学
名誉教授 高藤 英俊様



文化庁 文化資源活用課▶
文化財調査官 稲垣 智也様



パネルディスカッション風景



集合写真

令和7年度

第1回文化財フォーラム(檜皮葺)開催

日時 ● 令和8年2月12日(木) 15:00～17:00
令和8年2月13日(金) 10:15～15:30
会場 ● 厳島神社 五重塔
(広島市廿日市市宮島町1-1)
etto(エット)宮島交流館 ホール
(広島県廿日市市宮島町412)

厳島神社にて、2日間にわたり第1回檜皮葺文化財フォーラムを執り行いました。初めての試みとなった今回の檜皮葺文化財フォーラムですが、現在工事中の厳島神社 五重塔の現場見学に始まり、日を跨いでのetto宮島交流館ホールでの講義、討論会と、充実した内容となりました。講義においては、まず始めに、元請でもある株式会社増岡組の舛本様による工事の概要説明を行っていただきました。次に、厳島神社工務所の技師でもある原島様に、厳島神社の歴史から、これまでの台風による被害との闘いや珍しい二重屋根構造についての話まで、多岐にわたる内容となりました。

続いて、岡山理科大学 特担教授である江面先生による講義が行われました。表題にある「文化財保護の目的と創造的活用」とはどのようなことをいうのか。それに

は、まずは文化財とは何なのかというところから始まり、日本に古くから伝わる目に見えるものや見ることでできない無意識にあるものを、時間をかけて落とし込んでいくことにより文化は育まれていくということ、さらに、それをどのように活用していくのか等まで、非常に深く考えさせられる内容となりました。

最後に6名の職人によるディスカッションを行いました。内容は五重塔の施工における要点と檜皮の材料整形における各社の認識について、それぞれ意見を出し合いました。限られた時間の中でしたが、パネラーである各社の皆さんがどのようにして材料整形をしているのか、これだけの複数業者が同時にすり合わせをすることは簡単なことではないので、当保存会にとっても大変意義のある意見交換となりました。

今回、初の開催ではありましたが、多くの参加者を迎え、賑わいのあるフォーラムを開くことができました。これからもこのように多くの業者を交えての見学会、及び協議会を開催し、切磋琢磨しながら、屋根保存会としても、この仕事に従事している一個人としても日々精進していけるよう努力してまいります。

関係者の皆さまにはこのような機会を与えていただきこの場をお借りして御礼を申し上げます。

見学会 「厳島神社 五重塔」

現場説明・質疑応答 ● 厳島神社工務所 技師 原島 誠 様

協議会 「etto宮島交流館 ホール」

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 友井 辰哉

講 義 ● 株式会社増岡組 広島本店 現場代理人 舛本 貴幸 様
テーマ「国宝及び重要文化財厳島神社東廻廊ほか7棟 建造物保存修理工事 工事概要説明」
厳島神社工務所 技師 原島 誠 様
テーマ「厳島神社五重塔檜皮葺について」(厳島神社指定建造物の屋根から)
岡山理科大学 特担教授 江面 嗣人 様
テーマ「文化財保護の目的と創造的活用」

討論会 ● 職人(事前に選任)によるディスカッション
進行者 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 理事 松村 正徳

総 評 ● 文化庁 文化資源活用課 文化財調査官 結城 啓司 様

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 副会長 河村 雅史

見学会



工事概要を受ける



五重塔 檜皮葺見学

協議会



講義風景



令和7年度 文化財研修会

日時 ● 令和7年8月29日(金) 13:00~15:30
会場 ● 大本山妙心寺 花園会館
(京都市右京区花園木辻北町1-5)

今年度の文化財研修会は、大本山妙心寺 大庫裏保存修理工事の現場見学と、隣接する花園会館で大本山妙心寺 法務部長 柴山 昌実様による講演、そして工事担当の京都府教育庁 指導部文化財保護課 主査 村瀬 由紀史様による概要説明がありました。日本に数多くある臨済宗寺院約5,650院のうち約3,350院が妙心寺派であり、その大本山であるのが京都花園にある大本山妙心寺です。そのような場所での開催に、全国から正・準会員約65名の参加がありました。

始めに、柴山様から「妙心寺の歴史について」と題する講演がありました。約700年もの長い歴史の中で、数々の動乱や戦乱の時代に翻弄されながらも、少しずつ、ま

た時には大きく変化をしながら今日に至る話など、大変興味深い内容でした。

次に、村瀬様から、大庫裏保存修理工事の「修理概要説明と耐震補強について」の話がありました。地震大国日本である以上、耐震補強は切っても切り離せない重要なテーマとなります。我々の仕事とも関わりのある内容なだけに、真剣に耳を傾け、大いに勉強になりました。

その後は修理現場「大庫裏」の見学を行いました。「大庫裏」の建立は享禄元年(1528)、現在の庫裏は承応2年(1653)に改築されたもので、国内にある寺院の中でもとりわけ大きな規模の庫裏です。30年ぶりの柿葺き替え工事であり、大変貴重な機会となりました。

暑い中ではありましたが、皆さまの御協力のもと無事に研修会を終えることができ、感謝しております。御協力いただきました大本山妙心寺の皆さま、法務部長の柴山様、京都府教育庁 指導部 文化財保護課 主査 村瀬様には心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。



講演風景



概要説明風景

研修会



研修会 「第18回 文化財を支える技術2025 in 大本山妙心寺」

会場 ● 大本山妙心寺 花園会館

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 友井 辰哉

講演 ● 大本山妙心寺 法務部長 柴山 昌実 様

テーマ「妙心寺の歴史について」

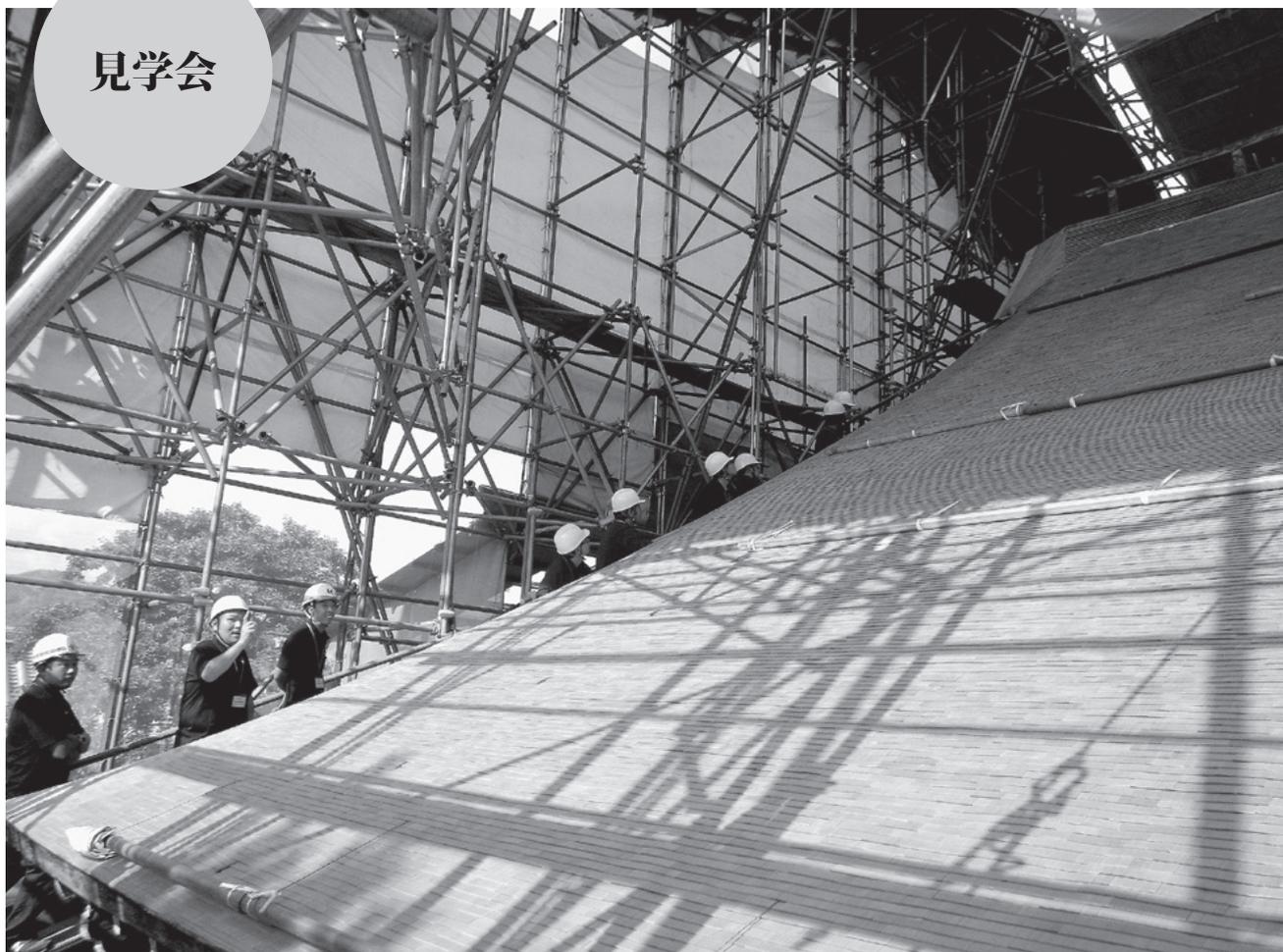
概要説明 ● 京都府教育庁 指導部 文化財保護課 主査 村瀬 由紀史 様

「修理概要説明と耐震補強について」

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 副会長 河村 雅史

見学会 「大本山妙心寺 大庫裏保存修理工事現場」

見学会



修理現場の見学をする参加者

令和7年度 ふるさと文化財の森システム推進事業 「森が支える日本の技術 2025 公開セミナー」開催

今年は2日間の平日開催で、見学・体験会、講演会を執り行いました。

清水寺境内においては、昨年引き続き板割りの実演を行いました。また、研修生による檜皮葺の実演、模型を使っての竹釘打ち体験、ビデオ上演などの催しも行いました。そして、京都市文化財建造物保存技術センター内では、八幡市立松花堂庭園・美術館 館長 平井 俊行様を招いて、「近世の植物性屋根材の変遷について」と題する講演を行いました。

今回は初の平日開催となりましたが、休日開催と比べ観光客の数にさほどの違いを感じることもなく、多くの方々に我々の事業についての紹介や体験をしてもらうことができたのではないかと思います。

また、昨年同様、檜皮採取の実演見学会を滋賀県大津市の園城寺(三井寺)にて行いました。11月初旬の開催

とあってか紅葉にはまだ少し早く、昨年ほどの参拝者は見受けられませんでした。昨年も来られたリピーターの方やわざわざこの見学会を目当てに来られた方、偶然通りかかった方もおられ、今回も賑わいのある見学会となりました。頭上遥か高いところに縄ひとつで上り下りしながら作業をする姿に驚きと感心をもって見学されていました。

今後も檜皮採取や檜皮・柿・茅葺のことをより認知してもらえるよう、引き続きこのような活動を絶えず行い、同時に多くの人々に少しずつでも興味・関心を持ってもらえるよう、技術向上を目指して精進してまいります。

今年もこのような機会を与えていただき、関係者の皆さまにこの場をお借りして御礼を申し上げます。



清水寺境内会場風景

名称 ● 令和7年度 ふるさと文化財の森システム推進事業「森が支える日本の技術 2025 公開セミナー」

主催 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

期 日 ● 令和7年10月1日(水)・2日(木)、11月8日(土)

会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター(京都市東山区清水2丁目205-5)
清水寺 仁王門周辺(京都市東山区清水1丁目294)
園城寺(三井寺)境内林(滋賀県大津市園城寺町246)

共 催 ● 京都市

後 援 ● 京都府教育委員会、京都市教育委員会、林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所、
公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益財団法人 京都古文化保存協会、
公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団、京都市内博物館施設連絡協議会

開催内容

1、文化財を支える技術の公開

期 日 ● 令和7年10月1日(水)・2日(木)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター
清水寺境内

(1) 伝統技術の実演「ユネスコ無形文化遺産登録 伝統建築工匠の技」

1. 檜皮葺
2. 板割り



檜皮葺実演



板割り実演

(2) 体験コーナー
竹釘打ち



竹釘打ち体験

(3) パネル・道具展示
(現場修理写真や道具・模型の展示)



京都研修センター内でのパネル展示

2、文化財講座

「近世の植物性屋根材の変遷について」

期 日 ● 令和7年10月1日(水)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター
講 師 ● 八幡市立松花堂庭園・美術館
館長 平井 俊行 様



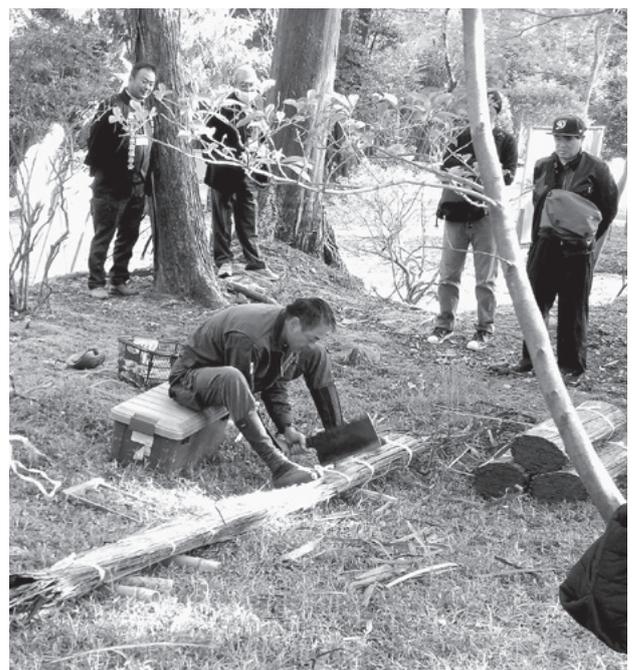
講演風景

3、檜皮採取実演 見学会

期 日 ● 令和7年11月8日(土)
会 場 ● 園城寺(三井寺) 境内林



檜皮採取見学会(実演)



檜皮採取見学会(実演)

主任文化財屋根葺士 第25回 検定会 実施

期 間 ● 令和7年10月20日(月)～25日(土)
会 場 ● 山南ふるさと文化財の森センター
受験生 ● 茅葺師2名、檜皮葺師2名

今回の検定会は茅葺師2名、檜皮葺師2名での受験となりました。茅葺師の受験生2名については、実技試験は合格し、そのうちの1名は筆記試験が不合格となりました。筆記試験だけ不合格の場合は、もう一度筆記試験だけの受験可能という特例がありますので、しっかりと学習し、断面図、計算など間違いがないようにして再チャレンジしてほしいと思います。



実施試験に挑む受験者



実施試験に挑む受験者



葺かれた屋根をチェックする検定員

主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

期 日 ● 令和7年11月14日(金)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

今回の更新講習会の参加者は26名、講師は京都女子大学 鶴岡 典慶教授です。昔とは違い、下請けに対して指導することなど、現在では更新講習会に参加している責任者としての立場でやるが増えました。

公共工事扱いであることが多い文化財の現場では、施工体制、状況、品質など、様々な箇所を我々屋根葺師も見なくてはならなくなりました。現場代理人と主任技術者は兼務可能なので、多くの現場で兼務している方が多いとは思いますが、基本的な仕事の違いを理解しているか再度の確認になったかと思えます。現場代理人は会社代表の代行として工事に参加し、全体的な管理業務を役割とします。直接、施工以外で発注者との交渉請求など

筆記試験で気になったのは、材料の数量間違い、図面から面積を出す際の寸法の読み間違いが多くあったことです。ここは責任者として必要な能力なので、間違いをしないように心がけてほしいところです。

檜皮葺の受験生2名については、双方とも実技試験で合格点に達せず、残念な結果となりました。各理事の採点では、箕甲の仕上がり、水切りの仕上げなど、基本的なところの技術をもう少し上げてほしいという意見が多かったように思います。各地方公共団体からの採点も少し厳しい声が上がリ、検定会の水準を維持していくためにも辛めの採点になったかと思われま

を担当し、主任技術者は施工計画、工程管理、品質管理、技術的指導を行わなくてはなりません。

今後、より一層必要となっていくのは、施工、工程管理、安全対策、対外関係、新規入場チェックなどの記録類、法的な提出書類を遵守することです。品質や材料の出来栄についても工夫し、よりよい報告となる打ち合わせをした上で施工することを心がけなければならないということです。さらに、社会性の観点から積極的に地域還元、情報発信をしていかななくてはなりません。これらの内容を踏まえた上で、主任文化財屋根葺士としての意識を持ってほしい、という鶴岡先生からの講義となりました。



鶴岡 典慶講師の講習

文化庁主催 「日本の技フェア」開催

日時 ● 令和7年11月21日(金)～23日(日)
10:00～16:00
会場 ● サンドーム福井 メインホール
(福井県越前市瓜生町5-1-1)
主催 ● 文化庁

福井の魅力と伝統技術の融合

今回は、会場の半分を福井県主催の物産展が占め、残りの半分を私たち技術保存会が担当するという、例年とは異なる新しい試みの構成となりました。地元の特産品と日本の伝統技術が隣り合うことで、より幅広い層の方々に足を運んでいただける機会となりました。

活気あふれる展示と実演

土・日曜日の開催期間中は、会場も大変な活気に包まれました。近年のメディアによる文化財保護への注目もあり、来場者の皆さまは非常に熱心に展示や実演をご覧になっていました。体験コーナーでも、伝統技術の奥深さに触れて喜んでくださる姿が印象的でした。

また、ステージ構成が工夫されていたおかげで、搬入・搬出や設営が例年以上にスムーズに進んだことは、運営面での大きな収穫となりました。



本物の技術を次世代へつなぐために

一方で、今後の運営面については、より良い形を模索していく必要も感じています。現在、限られた予算や人員体制の中で、当会が理想とする「本物の技術を正しく伝える展示・実演」を維持することが難しくなりつつあります。当団体としては、安易な簡略化に流されるのではなく、保存会だからこそ見せられる「本物の価値」を届けることが使命であると考えています。今後は他団体とも手を取り合いながら、実演環境の改善や適切な支援体制について、事務局側へ前向きな働きかけを続けていく予定です。伝統を守る誇りを持ちつつ、より無理のない、かつ質の高い情報発信ができるよう、今回の経験を次の一歩へとつなげてまいります。



竹釘打ち体験



展示

竹中大工道具館企画展

「植物×匠 めぐるいのち、つなぐ手しごと」参加

期 間 ● 令和7年 7月29日(火)～9月28日(日)
令和7年 10月11日(土)～12月14日(日)

会 場 ● 東京会場 国立科学博物館
(東京都台東区上野公園 7-20)
神戸会場 竹中大工道具館
(兵庫県神戸市中央区熊内町7-5-1)

主 催 ● 竹中大工道具館、伝統建築工匠の会
国立科学博物館、竹中大工道具館

竹中大工道具館からの依頼を受け、竹中大工道具館企画展「植物×匠 めぐるいのち、つなぐ手しごと」に参加しました。7月29日(火)～9月28日(日)までは東京会場として国立科学博物館で、その後10月11日(土)～12月14日(日)までは神戸会場として竹中大工道具館にて開催され、その間の7月20日(日)に当正会員 大野 浩二による「山と人をつなぐ仕事—原皮師が語る、檜皮採取



神戸会場チラシ

講演会

参加人数 ● 81名 (内外国人2名)



講演風景

の世界」と題した講演を行い、10月25日(土)、26日(日)には檜皮・柿の材料整形実演と竹釘打ち体験を共に竹中大工道具館にて行いました。

長い会期中で2日間のための体験・実演会であったにも関わらず多くの方が来場されたことに驚きましたが、大工道具や建築技術、日本の伝統建築に興味のある方にとって格好の場所とあって、非常に盛り上がりのある体験・実演会となりました。

体験・実演会

参加人数 ● 347名 (内外国人70名)



各種屋根展示



竹釘打ち体験



板割り説明

京都女子大学 見学と講義

期 日 ● 令和7年11月19日(水)、12月3日(水)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

本年度も京都女子大学の伝統技法演習において、2回に分けて学生に講義と実演体験を行いました。11月と12月の各回、それぞれ30名程度の参加者に、基本的な檜皮材料作成、屋根葺き体験、屋根葺きに関する講義をしました。普段なかなか目にすることのない内容と技術に、

学生は興味を持って聞いていたように思います。

時代を感じるのは、自筆でノートや記録をとる学生が年々減ってきたということです。ほとんどの人がスマートフォンでメモを取り、写真を撮って後日の記録としており、学生の学び方も変わってきたと感じました。



実演を見学する学生



竹釘打ち体験をする学生



講義風景

令和7年度 ジュニア京都文化観光大使による「檜皮葺」技術の体験

期 日 ● 令和8年2月21日(土)
会 場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

京都市が任命する小学生「ジュニア京都文化観光大使」11名が、伝統技法「檜皮葺」の学習・体験会を行いました。まず行われた屋根葺きに関する講義では、大使たちが熱心にメモを取る姿が見られ、京都の伝統文化を学ぼうとする意欲が強く感じられました。続く展示室の見学では、実際に使用される専門道具や精巧に再現された屋根模型を前に、参加者は興味津々の様子で見入っていました。

実技体験では、熟練の職人が繰り出す技術を間近で観察し、自らも素材に触れることで、その繊細さと伝統を守り続ける難しさを肌で感じる貴重な機会となりました。質疑応答の時間には、大使たちから次々と質問が寄せられ、伝統の技に対する深い関心がうかがえる充実したひとときとなりました。



30kgの材料を持ち上げようとする子供たち



文化庁による歴史的建造物の説明



檜皮の材料整形体験



竹釘打ち体験

令和7年度 特別講座 開講(全2回)

第1回「段ボール屋の革新と挑戦 ～梱包資材から社会価値創出へ～」



洛西紙工株式会社
取締役 小田 智英様

日時 ● 令和7年9月20日(土) 14:00～16:00
会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

特別講座の第1回は、京都で地域に根ざした段ボール製造を営む洛西紙工株式会社の小田智英様をお招きしました。家業を継ぐ予定のなかった一人の若者が、いかにして厳しい市場環境のなかで事業の再構築に挑み、段ボールという素材に新たな命を吹き込んだのか。その軌跡を辿ります。

【講座内容要約】

予期せぬ「家業継承」という ターニングポイント

小田様は1991年、栃木県で日本酒の蔵元を営む家の次男として生まれました。高校時代までは野球一筋。甲子園を目指し、心身を鍛え練習に明け暮れる日々を送ります。大学卒業後は、一生サラリーマンとして働くつもりで住宅設備大手のTOTOに就職しました。実家の酒蔵は兄が継ぐことになっており、両親からも家業を継いでほしいという話は一切なかったからです。

転機は突然訪れました。京都で段ボール製造業を営んでいた祖父からの「会社を継いでほしい」という一本の電話です。2020年、小田様は結婚したばかりの妻と共に京都へと向かいます。当時の小田様は、事業の全体像や数字について、十分に把握できていない状態にもかかわらず、跡を継ぐという決断をしました。「将来が安泰だ」という確信があったわけでも、合理的な判断があったわけでもありません。ただ、祖父や働いている社員、長くお付き合いいただいているお客様の願いに応えるという決断が、その後の彼の人生を大きく変えることになりました。

直面した「赤字」と「価値観の壁」

入社した2020年は、コロナ禍の真っ只中。かつてない外部環境の変化の波を目の当たりにし、従来のやり方だけでは先が見通せない現実を突きつけられました。洛西紙工の

經常利益は単年収益面で厳しい局面にあり、早急な立て直しが求められていました。「町工場」のイメージそのものの現場には、職人が目視や感覚をもってアナログで位置調整をする古い機械が並んでいました。事務所には手書きの事務作業も膨大にあり、ホームページも存在しない環境でした。創業者の祖父や叔父である社長に相談しても、当初は、経営の捉え方や危機感に世代間の認識差もありました。そのギャップに小田様は大きなショックを受けます。

小田様はまず、自社の現在地を正しく把握することから始め、自らホームページを一から勉強して作成し、生産体制の見直しや支出の削減に着手するなど、必死で現状打破を試みました。同時に、現場を知るために30歳以上年上のベテラン職人たちに混じり、製造オペレーションや営業、受発注などあらゆる業務を共に行いました。「社長からは『無理に覚える必要はない』と言われましたが、同じ目線で作業をしなければ皆が何を感じてどのように仕事に向き合っているのか、共通言語が持てないと思ったのです」

しかし、当時感じた最大の壁は技術や経験ではなく「価値観」でした。大量生産・労働生産性重視の時代を生きてきたベテラン従業員にとって、仕事とは「決まった時間に現場に立ち、黙々と手を動かすこと」という、ものづくりを支えてきた誠実な文化でした。達成感や将来像を共有する機会が限られていたことに、小田様は課題意識を抱きます。また、「洛西紙工がなくなると、一体誰が困るのか？」という問いに、当時の自分は答えることができませんでした。

[経営理念の構築] 株主利益よりも「ワクワク」を

小田様は自問自答を続けました。大学の経営学部で当たり前のように学んだ「企業の最大の目的は株主利益の最大化」という正論が、自分の心には全く響かなかったからです。「十分なお金を稼ぎながら、人に喜ばれる仕事ができるか」その答えを求めて、彼は自社で扱う「段ボール」という商材を徹底的に見直しました。

そこで気づいたのは、段ボールが持つ圧倒的な社会的

価値でした。リサイクル率は95%を超え、瓶や缶よりも高い「資源循環の優等生」。古紙90%、パルプ10%、接着剤にはコーンスターチ（トウモロコシ）を使用しており、地球環境に極めて優しい。「この世界トップクラスのリサイクルシステムを活用し、梱包用ケース以外の用途を切り拓けば、社会に必要とされる会社になれる」そう確信した小田様は、しばらく大きな設備投資を控えていた会社に、最新のデジタルカッティングマシンの導入を決意します。

[新事業の立ち上げ]

什器と知育、そして「共創」

最新機械の導入には、当時経営陣からの反対もありました。「機械の償却ができるのか」という経営陣の視点に対し、小田様は「理念を形にし、事業の可能性を広げるため」と説得を続け、1年かけて導入を実現しました。これにより、机、椅子、屋台、看板といったあらゆる空間を自在に演出できる「什器」の製作が可能になりました。CADもIllustratorも触ったことがない中でのゼロからのスタートでしたが、小田様は「自社完結」を捨て、外部との「共創」に活路を見出します。

東京ビッグサイトで開催された「インターナショナル・ギフト・ショー」では、京都の企業50社のブース什器を強化段ボールで製作。大丸京都店とのプロジェクトでは、展示会の設営・撤去が容易で、労働効率も輸送効率も高く、不要になれば廃棄コストゼロで古紙回収に出せる「段ボール什器」の利点を証明しました。

また、製造工程で出る端材を活用した「知育工作キット」もリリースしました。山科の有限会社マルシゲ紙器から共感を得てカラフルな紙の端材の提供を受け、京都芸術大学の学生がパッケージをデザインする。この京都企業と学生の共創から生まれたプロダクトは、大丸でのワークショップや、小学校でのSDGs環境教育教材へと発展しました。「教員の教材準備の手間を減らし、最後は子供たちが片付けとして古紙回収に出すだけ。自社の事業資産を活かして子供たちの創造力を養い、資源循環を体感してもらう、実践的な教育の場にもなっています」

既存事業を超えた 「社会性と経済性の両立」

小田様が進める新規事業は、単なる「副業」ではありません。既存の段ボールケース事業は過酷な価格競争の世界です。しかし、新規事業は競合が既存の段ボール業者ではなく、プラスチックや鉄などの全く異なる業界や市場になります。自分たちで価格を決められる「ものづくり」であり、高付加価値な事業ベースを構築することができました。売上高の10%をこの新規事業で賄うという目標は、コロナ禍のような外部要因による変動をカバーするリスクヘッジにもなっています。



さらに、学生のアイデアを社会実装につなげることや、フードバンク事業者との連携など、段ボールを通じて環境問題以外の社会課題解決にも貢献し始めています。大手企業が手を出したがるが、しかし確実にそこに存在する細かなニーズに寄り添うことで、「社会性と経済性の両立」が現実のものとなりました。

[まとめ]

想いを発信し、共感を生むこと

小田様は、講演の締めくくりにご語られました。「経営理念や自分の想いを発信し、それが社会へ伝わること。そこから生まれる『共感』こそが、会社を存続させる最も重要な資本になる可能性があります」

祖父からの電話に始まった小田様の挑戦は、今や従業員15名と共に、京都から社会を豊かにする大きなうねりとなっています。梱包資材という「当たり前」のものに新しい価値を吹き込む姿勢は、私たちに多くの示唆を与えてくれました。

【要約編集後記】

小田様の話の中で印象的だったのは「ワクワクするかどうか」という判断基準です。理論や数字も大切ですが、最終的に人を動かし、社会を変えるのは、経営者の純粋な想いと、それに対する共感なのだと感じました。洛西紙工株式会社今後の取り組みに、より一層注目が集まります。

小田 智英様 プロフィール

2014年早稲田大学商学部卒業後、TOTO 株式会社に入社。営業職を6年経験の後、2020年洛西紙工株式会社に入社。

1960年の創業以来培われた技術や信用をベースに、社会課題解決の新しい仕組み作りや、ソーシャルビジネスの構築に取り組んでいる。梱包資材用途にとどまらず「ダンボールでこんな面白いことができるのか!」と言われるような新しい価値を生み出し、地域や社会に貢献することを目指している。

第2回「笑いで脳を活性化」



落語家
林家 きく姫様

日時 ● 令和7年11月15日(土) 14:00～15:30
会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

今回は落語家の林家きく姫様をお招きし、「笑いで脳を活性化」と題してご講演いただきました。真打ちとして第一線で活躍されるプロの技を間近に感じ、会場は終始、温かな笑いと活気に包まれました。

【講座内容要約】

落語家・林家きく姫に学ぶ 「芸」への姿勢と想像力

講演は、落語の真髄である「想像力」の重要性から始まりました。小咄こぼなしを通じて参加者の想像力を存分に引き出した後、話題はきく姫様の落語家としての原点へ。師匠である林家木久扇様への入門エピソードでは、呼び鈴を鳴らすと本人から「いませんよ」と返ってくるという、師匠譲りのユーモア溢れる逸話に会場は大爆笑。修業時代の幕開けを鮮やかに描写されました。

特に印象的だったのは、修行中の心構えについてのお話です。最初に取り組んだのは落語ではなく、なんと「ラーメンの売り方」だったと言います。「まずい」という自虐を逆手に取る商法を説きつつ、「ぜひ食べてみて。ただし翌日が休みの日にね」という絶妙なオチに、参加者一同、話の組み立ての妙を堪能しました。

また、1日500円という当時の寄席給金について、き



く姫様は「少ないどころか、師匠方の芸を間近で教われる。どれほど有り難いことかと思っていた」と振り返られました。真打ち昇進まで15年。芸事の厳しさを「仕事上の苦労は当たり前のこと」と淡々と語り、芸を上達させることでそれらを乗り越えてきたという言葉には、一線級のプロが持つ凄みが宿っていました。

終盤には、偏つくりと旁を組み合わせて新しい漢字を作る創作遊びが行われ、「酒+魚=ウォッカ」「朝+鳥=ニワトリ」など、参加者からも独創的なアイデアが次々と飛び出しました。

「芸を教わることが有り難い」という謙虚な姿勢。これは、我々技術保存会に身を置く者にとっても、深く傾聴すべき言葉ではないでしょうか。職種は違えど、技術を磨き、継承していく者が持つべき「共通の真理」を再確認できた、極めて意義深いひとときとなりました。

林家 きく姫様 プロフィール

1970年5月8日 愛媛県生まれ

1987年 林家木久蔵(現木久扇)に入門

2001年 真打昇進

2000年～2025年3月 東京都提供番組「東京サイト」(テレビ朝日)に出演

お肉大好き、音楽好き。アニソン～デスメタルまで。51歳からサーフィンを始め、同じくサーフィンをする落語家4人で、「落語協会サーフィン部」落語会を全国で開催している。

令和7年度 「京都市文化財建造物保存技術研修センター」 利用実績のご紹介

本年度も多くの方々にご利用いただきました。当保存会の研修においても使用しておりますが、選定保存技術団体の研修から学生のゼミ等まで、様々な方の活動の場としてセンターをご提供しております。

申請いただければどなたでもご利用いただけます。京都市内での研修、イベント等、計画がございましたら、下記までお問い合わせください。

TEL 075-532-4053



当日見学の修学旅行生

●利用実績

【令和7年】

- 5月 ●有限会社 川面美術研究所
 - MK タクシー ハイヤー部
- 6月 ●一般社団法人 文化財修理技術保存連盟
 - 一般財団法人 社寺建造物美術保存技術協会
 - レーベン清水五条管理組合
- 8月 ●中野ゼミ
- 9月 ●一般社団法人 文化財修理技術保存連盟
 - 公文国際学園
- 11月 ●一般社団法人 文化財修理技術保存連盟
 - 一般財団法人 社寺建造物美術保存技術協会
 - 京都女子大学
- 12月 ●一般社団法人 文化財修理技術保存連盟
 - 一般社団法人 全国伝統建具技術保存会
 - 京都女子大学

【令和8年】

- 2月 ●一般財団法人 全国伝統建具技術保存会
 - 「伝統建築工匠の技」の保存、活用及び発展を推進する会
 - ジュニア京都文化観光大使
 - 京都市内博物館施設連絡協議会・京都市教育委員会主催
～ 第29回 京都ミュージアムロード 参加 ～
- 3月 ●一般社団法人 文化財修理技術保存連盟



公文国際学園 講義・体験



ジュニア京都文化観光大使 体験

謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

杉本 惣一 さん

[享年 67 歳]

京都府出身



杉本 惣一様が、去る令和 8 年 1 月 8 日に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、お知らせ申し上げます。

杉本様は京都府内を中心に文化財保存修理に従事され、長年にわたり当会の活動に多大なご貢献をいただきました。これまでの功績を偲び心よりご冥福をお祈りいたします。

あ と が き

新年を迎え 2 か月が経ちますが、振り返れば 2025 年は日本にとって大きな転換点となる一年だったと思います。

世界中が注目した大阪・関西万博では、会場を象徴する大屋根リングが世界最大の木造建築物としてギネス認定され、木造建築の可能性が改めて示されました。最先端の技術を駆使した巨大な大屋根リングが未来を照らす一方で、私たち保存会が守り続けているのは数百年という時を越えて今に息づく檜皮葺や柿葺、茅葺といった伝統の技です。万博の華やかな熱狂の傍らで、静かに社寺の屋根を守る職人の姿は流行に左右されない日本の美の根幹であると思います。

また、近年の極端な猛暑や記録的な大雨は私たちの現場にも厳しい試練を与えています。気候変動という避けがたい現実を前に建物を雨露から守る屋根の重要性はますます高まっています。生成 AI の急速な普及など社会の仕組みが刻々と変わる中であっても、最後は人の手による繊細な技と経験が文化財を支えるという事実は変わりません。

伝統とは単に形を残すことではなくその時代ごとの知恵を積み重ねていくこと。2026 年も皆さまと共に日本の宝を次代へと繋ぐ歩みを止めることなく、精進してまいりたいと存じます。

発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5

京都市文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064

<https://shajiyane-japan.org>

古文化 第 135 号

令和 8 年 2 月 28 日発行

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

児島 真介さんの古里

桃太郎伝説の鬼が居た城・鬼ノ城^{きのじょう}

(岡山県)

児島真介さんのふるさとである岡山県のシンボルは桃太郎だ。岡山といえば桃太郎、という認識は全国的にもかなり浸透しているのではなかろうか。もちろん犬、猿、キジを引き連れた桃太郎は架空の人物で、鬼退治は絵本の中の物語だ。にも関わらず彼の生国や鬼ヶ島を名乗る場所は全国各地に点在している。その中であって岡山が「桃太郎伝説のうまれたまち」として日本遺産に登録されているのは、この地に伝わる吉備津彦命^{きびつひこのみこと}の鬼退治伝説がおとぎ話の桃太郎の原型とされているからだ。

奈良に平城京が築^{うら}かれるよりもずっと前、吉備の国と呼ばれた岡山には温羅という名の鬼が住んでいた。吉備津彦命は大和朝廷の命を受けて部下とともにこの地に攻め寄せ、温羅と戦った武人なのである。

温羅は身長4mを超え、両眼が虎のように光る、真っ赤な髭をぼうぼうと生やした渡来人だったという。彼は鬼ノ城と呼ばれる城に立てこもって吉備津彦の軍勢に対抗したが、激戦の末に敗れ去った。

主を失った鬼ノ城の石垣は千数百年後の現代まで残り、そびえたつ城門は県南部を走る国道からも望める。今でこそ山城とも見えるが、戦いのあった当時は、国道が通る備前平野はまだ海の底だったと考えられている。ミコトの軍勢は船で城に攻め寄せたのかもしれない。

両者の戦いは桃太郎の鬼退治として後の世にまで伝えられ、岡山駅前には桃太郎像が立てられている。しかし考えてみれば桃太郎のモデルとなったミコトはヤマトからの使者であり、元々この地を治めていたのは温羅の方なのだ。多くの物語は勝者の視線から描かれる。温羅が鬼とされることを地元民が望んでいたとは限らない。

岡山市では毎年8月に「うらじゃ」という祭が開催される。「うらじゃ」とは岡山弁で「我らは温羅である」という意味だ。祭当日は鬼に扮した何千人もの地元民が大通りに繰り出し、「うらじゃー」と声を挙げては踊り狂うのだ。



古文化

第 135 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会